The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鑑定筆記抄（一）：小杉榲邨の古美術調査の世界
Author(s)	伊井，春樹
Citation	詞林. 1996, 20, p. 35-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67389
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

鑑定筆記抄（一）

―小杉榲邨の古美術調査の世界―

伊井　春樹

小杉榲邨（一八三四～一九一〇）は、『古事類苑』の編纂者として知られるように、明治期における国史、国文学研究の基礎を築いた一人で、幕末には政治的な動乱の中で幽閉される運命にも見舞われもしたが、篤学の士として後には東京大学や東京美術学校の教授となり、帝室博物館調査掛として全国の美術品の調査にも大きな功績を残すことになる。著書には『有職故実』などがあるが、ここに紹介する『鑑定筆記』は、ほとんど連日にわたって調査した美術品の詳細な記録で、榲邨の業績しても知られることなく、公刊もされないままである。

東京国立博物館は、明治五年三月に「文部省博物館」として湯島聖堂の大成堂で博覧会を催したのが始まりだとされるが、所轄を変りながら、明治二十二年には上野に地を占め、「帝国博物館」の名称となる。前年から岡倉覚三らによって臨時全国宝物取調の事務が宮内省から博物館に移管され、「古寺社保存法」とともに、館員を各地に派遣して全国の美術品の調査が進められていった。やがて「帝国奈良博物館」（明治二十八年）、「帝国京都博物館」（明治三十年）の開設とあいまって美術品の調査も本格化していく。明治三十三年七月には「東京帝室博物館」と名称の変更があり、翌三十四年には調査の成果を取り込んだ『稿本日本帝国美術略史』が出版されている。

榲邨の『鑑定筆記』は現在天理図書館に蔵され、和綴じ本で八冊存する。第一冊目の表紙には左肩に「鑑査筆記　三」とする題簽が押され、右端には「明治三十年　三十一年　三十二年　三十三年」と打ち付け書きされる。この冊だけ外題を「鑑査筆記」とするものの、以下八冊はすべて「鑑定筆記」とする。また、「三」とするのにより、これ以前に「一」と「二」があったはずで、一冊目の収載年数からすると、「臨時全国宝物取調」が博物館主体で開始された時点から記録されていたのかも知れない。第十冊は他の冊とは違っ

てきわめて薄く、「鑑定筆記　十」の題簽と、右端に「明治四十二年十一月起リ」と記し、同年十二月二十五日の記事で終わり、後半は二十丁ばかり白紙の罫紙が続く。榲邨は翌四十二年に七十七歳で亡くなっているため、いわば死ぬ直前まで美術品の調査に終始していたともいえよう。

第一冊は、「帝国博物館」と印刷された罫紙を用いており、巻末には「六月三十日限帝国博物館鑑査部ノ廃止」とし、第二冊目以降は「東京帝室博物館」の罫紙となる。榲邨は目にしたものはすべて詳細に記録してとどめようとしていたのか、懐紙や短冊であれば歌をメモし、添状や奥書類、器物になると形を模写するなどその態度は緻密である。展覧会の案内は貼付し、付箋等によって内容をさらに記すなどしていく。ただ、一度に大量に美術品を調査し、しかも清書したノートではないだけに、きわめて判読に困難がともなう。本人も汚損などで読めなかったりしたのか、空白をもうけたり、書写の誤りではないかと思われる点も多い。ただ、明治のこの時期に調査掛として鑑査しただけに、今日からすれば貴重な品々を惜しみないほど見ているというのが、私の率直な感想である。調査品も大半は仏書とか文書、器物、絵画などで、時には古銭とか古銅壷のようなものまで目にすることもあった。

本来は、榲邨の手にし記録した『鑑査筆記』すべてを翻字し、当時存在し世に知られていた美術品の姿を再現するとともに、それぞれの内容を検討すべきであろうが、あまりにも膨大な量になりすぎるし、私はその任でもない。ここでは、個人的に関心のある、中古中世の国文学にかかわる資料だけを抜き出し、明治三十年代の様相をかいまみることにした。さらに、それらの作品について考察も加えるべきであろうが、気のついたものだけに＊として以下にメモを加えた。私の読み間違いも多いであろうし、榲邨自身の空欄も存するのだが、彼の筆跡の判読できない箇所については□を挿入した。ここには明治三十年の一年間を対象としたが、今後判明する限りは補訂していきたく思っている。本稿に翻字した部分の作品と人名については、簡単な索引を巻末に付した。

なお、翻刻をお許しいただいた天理図書館に深謝申し上げる。（天理大学附属図書館本翻刻第七九〇号）

（第一冊明治三十年）

三十年　一月八日　　宝物取調局鑑査

高松宮御蔵品之内

珍　伏見院宸翰筑後切　雲紙　頗る出来私翰状の□

円融院の―　国家／重宝

＊表紙見返しに筑後切を模写した紙片を貼付する。なお、この歌は拾遺集（巻十七、雑　春、一〇四七）の一首。現存にナシ。

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

付記　すでに述べたように、ここには現存する『鑑定筆記』の第一年目のうち、文学、美術にかかわる記事だけを抜き出した。本来ならば、記事すべてを翻字し、筆者の活動及び当時における古美術の流布を知り、今日では失われた資料の発掘をすべきであろうが、膨大な量になるためこのような抄出で紹介するに留めた。なお、これは今後も時折継続していく予定である。

索引について

以下に、記事に見られる人名や作品名を抜き出し、五十音順に配列した。

人名索引（天皇、女性名以外は音読みによる五十音順の配列）

阿仏（四月十二日）
安信（十一月十三日）
為家（四月十二日）
伊行（七月八日）
為重（四月十二日）
伊川法印（五月十六日）
為定（四月二十六日）
逸勢（四月十二日）
為徳（四月二十三日）
伊都内親王（四月十二日）
伊房（三月二十一日・七月八日）
尹祥（二月二十七日・七月二十二日）
永範（四月二十六日）
雅経（四月十二日）
雅親（四月二十六日）
家隆（一月三十一日・四月十二日）
貫之（一月二十四日・四月十二日）
基熙（四月十二日）
京極殿→良経
挙時（三月二十一日）
空海（三月二十一日）
元信（十一月十三日）
行尹（四月十二日・四月二十三日）
光悦（九月二十一日）
光格天皇（三月一日）
光広（二月一日・四月二十六日・七月六日）
高枝王（十一月二十五日）
光信（四月十二日・十月一日）
行成（一月二十四日・四月十二日・十一月二十五日）
公任（三月二十一日・四月十二日・七月八日）
後光厳院（一月十五日）
後西院（三月十六日・九月十四日）
後醍醐天皇（二月二十七日）
後伏見院（七月二十二日）
後水尾院（一月十五日）
後陽成院（一月十五日）
嵯峨天皇（十一月二十五日）
佐理（四月十二日・十一月二十五日）
三楽（五月十六日）
実兼（七月二十二日）
俊成（四月十二日・十二月十八日）
俊忠（一月二十四日）
俊頼（一月三十一日・四月十二日）
常信（二月十日）
常房（七月十七日）
聖武天皇（二月二十七日）
時頼（一月三十一日）
信綱（四月十二日）
西行（一月二十四日・三月二十一日・四月十二日・五月十九日）
正臣（四月二十日）
正宣（三月二十一日）
寂蓮（七月八日）
尊円（四月二十六日）
尊昭親王（十二月十八日）
尊朝法親王（四月二十六日・十一月十五日）
宗忠（四月二十日）
尊鎮法親王（四月十二日）
探幽（二月十日・三月二十一日）
長円（四月二十六日）
通俊（七月二十二日）

貞愛親王（四月十二日）
定家（一月二十四日・二月一日・四月十二日・七月六日・七月二十二日・十月二十五日）
定信（三月二十一日）
定澄（四月九日・十二月二十六日）
道真（四月十二日・四月二十三日）
道風（三月二十一日・四月十二日・五月十九日・七月六日・七月八日・十一月二十五日）
仁和寺法親王（一月十五日）
伏見院（一月八日）
政子（一月三十一日）
明尊（三月二十一日）
容斎（三月二十日）
養川院（五月十六日）
予楽院（十一月二十五日）
頼寿（四月十二日）
良経（三月二十一日）
霊元院（一月十五日）

作品名索引

秋萩帖（四月十六日）
綾地切（五月十九日）
石山縁起（二月十六日）
伊勢物語（九月十四日）
絵因果経（五月二十二日）
大坂切（七月八日）
大聖武（十一月二十五日）
小野切（十一月二十五日）
桂本万葉集（四月十二日）
賀陽院水閣歌合（三月二十一日）
寛治五年十月十三日親子家歌合（一月二十四日）
巻子本曽丹集切（三月二十一日）
熊野詣記（四月二十日）
源氏物語（一月十五日・七月八日）
源氏物語表紙絵（十月一日）
源平合戦図（十一月十三日）
高野切（一月二十四日）
古今集（三月二十一日・四月十二日）
小島切（五月十九日）
後拾遺和歌集（七月二十二日）
後撰集（七月八日）
古筆手鑑（二月二十七日・五月十九日・七月十七日・十一月十五日・十一月二十五日）
斎宮女御集（三月二十一日）
嵯峨本（五月二十二日）
左大将家歌合（三月二十一日）
更級日記（四月十二日）
三十六歌仙（九月二十一日）
筋切（十一月二十五日）
十訓抄（十月一日）
釈日本紀（十月一日）
拾遺集（一月八日）
庄園譲文（一月三十一日）
職原鈔（四月二十六日）
続日本紀（十月一日）
新楽府（三月二十一日）
新古今和歌集（一月十五日）
住吉物語（四月二十日）
寸松庵色紙（七月六日）
大安寺縁起（四月十二日）
忠度百首（四月二十六日）
筑後切（一月八日）
中右記（四月二十日）
長恨歌（二月十日・四月九日）

長恨歌伝（十二月二十六日）
天神縁起（四月十二日）
土佐日記（三月二十日・十月二十五日）
萩原殿三十首和歌（四月二十六日）
広沢切（七月二十二日）
方丈記（五月二十二日）
本阿弥切（四月十二日・五月十九日）
屏風土代（四月十二日）
道風画像（四月十二日）
冥報記（三月二十一日）
文徳実録（十月一日）
好忠集（三月二十一日・五月十九日）
朗詠集（三月二十一日・四月十二日・七月八日・十一月十五日）
六百番歌合（三月二十一日）
和歌三神の図（四月二十三日）

（いい・はるき　本学教授）

出版物案内

伊井　春樹編
保坂本　源氏物語　全一二巻 別巻一 付索引編二巻（既刊一一巻）
（おうふう　各巻一八〇〇〇円）

本文研究　考証・情報・資料　第一集（和泉書院　三六〇五円）
松尾切（源氏物語歌集）考　伊井　春樹
源氏釈所引「源氏物語」の本文について　渋谷　栄一
保坂本源氏物語の本文の一性格　中村　一夫
陽明文庫本源氏物語青表紙本系本文の仮名遣い　井藤　幹雄
コンピュータ上の図書巻末索引の自動作成　谷口　敏夫
国冬本源氏物語Ⅰ（翻刻　桐壺・帚木・空蟬）　伊藤　鉄也・岡嶌偉久子

古代中世文学研究論集　第一集（和泉書院　近刊）
執筆者　岩坪　健　佐藤　明浩　田島　智子
渡会　敦幸　堤　和博　近本　謙介
中本　大　阿部　真弓　滝川　幸司
中原　香苗　山崎　淳　海野　圭介
川崎佐知子

伊井　春樹著
成尋の入宋とその生涯（吉川弘文館　二六七八円）
成尋阿闍梨母集全釈（風間書房　一四四二〇円）